

「弱いロボット」の吸引力

——坂口さんと岡田さん

白石正明（医学書院 シリーズ「ケアをひらく」担当）

以前、ある版元で発行している web マガジンの取材を受けたことがある。「ケアをひらく」に注目しているという。ちょうどそのころ、同シリーズの『坂口恭平 躁鬱日記』を編集していたころだったので、必然的に坂口さんの話が多くなった。インタビュアーの女性は、坂口さんというと「才能溢れる人だけど、押しが強くてちょっとコワイ」という印象を持っているようだった。

これは私だけではないと思うけれど、人と話していると相手を驚かせたいという欲望がむくむく湧いてきますよね。インタビューというなかば仕事の話し合いでも同じで、たしかに坂口さんにははち切れんばかりの才能はあるしウザいところもあるけれど（笑）、それとの真逆な部分が実は魅力的なんだ——。そんなことを言いたくなったら、つい「坂口さんって、弱いロボットなんですよ」と口走っていた。坂口さんは弱いロボット。一度口にしたら、彼についてそれ以上の評言はないように思えてきた。

「弱いロボット」とは、今回の「ライフ」展に参加している岡田美智男さん（豊橋技術科学大学教授）が率いる ICD-LAB のメインコンセプトである。たとえばゴミ箱ロボットは、ゴ

ミを見つけることはできるけれど、拾うことができない。マゴマゴしている彼を見ると、通りかかった人は、つい代わりに拾ってあげてゴミ箱（つまり彼）の中にゴミを放り入れてしまう。つまり彼には他者を巻き込む力があるのだ。その力の源泉は、彼自身の中で行為が完結しないという「弱さ」である。



豊橋技術科学大学 ICD-LAB「弱いロボット」

* * *

坂口さんに初めて会ったのは、2011年、奈良県で行われた《「自分の仕事」を考える3日間》というイベントでだった。少し遅れて会場に着くとひとりの青年がすごい勢いで話している。時間が来て壇上から降りても同じ調子でしゃべっている。会場の人とやりとりしている声の調子には勢いがあって、私は次の登壇者ではなく、ついそちらのほうにばかり耳を傾けてしまった。

夜になって少人数の懇親会に参加させてもらったが、そこでも彼はずっとしゃべっていた。私には聴覚優位の傾向があり、人の話を内容ではなく声やメロディとして聞いてしまうのだがあたかも「ひとり音楽会」のようだった。それでいて不快に思わない、というかずっと聞いていたい気持ちにさせるのは、彼の語りが楽曲として優れていたからだろうと思う。だから話の内容はまったく憶えていないのだが、あるとき彼の口から出た「自分は躁鬱病の診断を受けていて……」というフレーズだけは、耳を通り越して頭に残った。

その数年後に突然坂口さんから電話が掛かってきて、彼の日記を見せてもらうことになった。思念が次から次へとつながって現実と想像の境がわからなくなるような話のグルーブ感に引き込まれてしまった。しかしこれをぜひ出版したいと私に思わせたのは、きらびやかな才能がほとばしっているその部分ではない。鬱状態のときに書かれた日記——「鬱記」——の、あまりのつまらなさである。

一言でいうと思春期にさしかかるところの中二的な苦しさ（「僕は何をやってもダメだ」的な）が延々と綴られている。いま現在、全国で 100 万人は同じようなことを書いてるんじゃないかと思えるくらいの凡庸さである。ANA 機内誌連載の取材先のドイツで、目に入るもの、聞こえるもの、触れるものを一瞬にして自分の物語内部に取り込んでしまうような圧倒的才能が横溢する同じ日記に、これが収められているのが信じられなかった。しかし、あそこ的人是に一方でこんな「弱さ」を抱えているのか、と思ったとき、私はすでに坂口恭平の圏内

に吸引されていたのである。



5月23日「自作ギターの音色に耳を直接傾ける会」での坂口恭平さん

* * *

「どうやって本を企画しているのですか？」と聞かれることがある。おそらく多くの編集者はそれにうまく答えられないと思う。なかにはうまく答えをする人もいるかもしれないが、きっとかなりいい加減に答えている。

というのは、聞いている人はたとえば、今後の企画のためにどういう方向に情報のアンテナを伸ばしたらいいか、というように“未来に向けた”時間軸で聞いているのだが、現実には「あのときあれがあったから企画できたんだよね」というように“過去に向かって”しか言及でき

ないからだ。企画がある種の思いつきであるなら、「意図的に思いつくことはできない」のである。気づいたらこうしていたというように、受動的な相においてしか表現できない。

『坂口恭平 躁鬱日記』は今ここで述べたようなかたちで、つまり坂口さんに巻き込まれるようにして出来上がった受動的な本だが、一方の岡田美智男さんの『弱いロボット』はもう少し能動的だ。偶然目にした雑誌『現代思想』で岡田さんのロボット論を目にして、ぜひこの人の福祉論を読みたいと思い、日を置かず岡田さんに手紙を出したのだった。

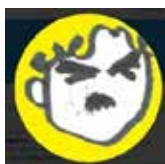
今でもそうだろうが、福祉や看護は、たとえば医学などに比べて「遅れている」と思われている。科学的じゃない、からである。ただここでいわれる科学とはせいぜい因果関係が明確だという程度のことである。因果関係なんて、登場する変数が少なければ少ないほど際立ってくる。だから Plan-Do-See なんて、閉じられた世界で、自分の能力をできるだけ低く見積もって行う、実に貧しい営みである。

しかし岡田さんの考えるロボットは自分を閉じない。閉じないから、単体としてはツッコミどころ満載で、どうみても「弱い」。もしその能力を数字としてカウントしたら、それは限りなく「0」に近いだろう。そこは余白でしかない。しかし余白であるからこそ他者が入り込めるのだと思う。その結果、気づくとそこは豊かな場になっている。(関係ないけどサッカーだっていちばん大事なスペースは空けておいて、そこに誰かに走り込んでもらいますよね。だいたい初めからそこにいたらオフサイドになっちゃうし)。

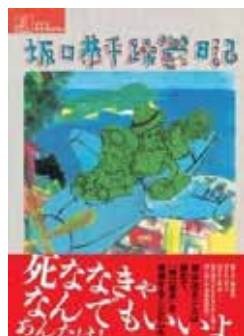
岡田さんは福島県の出身で、大学も東北だ。初めて関西に行ったときにみんなしゃべりがあまりにうまいことに衝撃を受け、おしゃべりロボットみたいなものを作ろうとしたらしい。でもそこで「しゃべりはひとりでは成立しない」ことに気づいた。手紙を出した数日後にうかがった豊橋技術科学大学の研究室で、岡田さんは淡々と、というより訥々と、そんな話をしてくれた。なんか私の心は晴れ晴れとしてきて、そのままご自宅にうかがって、たくさん飲んで、東京の会社に向かったのはその翌朝だった。

坂口恭平さんと岡田美智男さんは、見た目も業績も性格も生まれも何から何まで違うけれど、ふたりとの出会いについて書いていたら、「なんか似てる」と思えてきた。私の中にもあるふたりに似た部分が、そう思わせるのかもしれないけれど。

執筆：白石正明 しらいし・まさあき



1958年東京生まれ。医学書院で雑誌『精神看護』や看護実務書のほか、「シリーズ ケアをひらく」を手がける。同シリーズは2000年にスタートし、37冊（2020年5月現在）を刊行。毎日出版文化賞、小林秀雄賞、大宅壮一ノンフィクション賞、新潮ドキュメント賞など、受賞多数。Twitter:@shiraishimas



《シリーズ ケアをひらく》より

『弱いロボット』2012年09月発行

定価 2,200円

著：岡田 美智男

『坂口恭平 躁鬱日記』2013年12月発行

定価 1,980円

著：坂口 恭平